

認知症母との「DIARY」

越谷の写真家・山崎さん写真集
介護の3年間、「痕跡」記録



自宅の庭で写真集を手にする山崎さん＝越谷市



2003年6月8日に撮影された母いくさんと自宅の庭の写真＝写真集「DIARY」より



越谷市在住の写真家山崎弘義さん(58)が、認知症の母を介護しながら撮影し続けた写真を集めた、自身初の写真集「DIARY 母と庭の肖像」を出版した。山崎さんは「苦しい状況にいる人に、なんらかの生きるヒントを読み取ってもらえればこの上ない」と話す。

山崎さんは3年前まで市役所に勤めていた。広報課に配属されたことをきっかけに一眼レフに目覚め、1980～90年代は東京で路上スナップを撮影し、雑誌や個展で発表してきた。

だが99年ごろから同居の母いくさんに、夜の徘徊など認知症の症状がみられる

「介護の先にあるのは死で、何も残らないと感じた。記録することで自分自身と母の痕跡を残したかった。2001年から母が亡くなるまで約3年間、ほぼ毎朝、母と自宅の庭を撮影し続けた。母の記憶から消えないようにと、毎日、撮影しながら母自身や父の名前を尋ねた。

自宅にいる時間が長くなることで、季節や日によって表情を変える庭にも目がとまるようになっていた。写真集にはこんな記述がある。

02年4月25日 今日日は落

「水とろ」一つでエコ入賞

さいたまの小学生・石田彩乃さん



Eco壁新聞コンクール

身近なエコをテーマに小学生が壁新聞を作る「第7回Eco壁新聞コンクール」(全国銀行協会主催、朝日新聞社後援)で、さいたま市立岸町小学校の新3年生、石田彩乃さん(8)の作品「水とろ一つでエコかつろ」が入賞を果たした。

全国から過去最多の9266点の応募があり、入賞は18点。石田さんの作品は、日常生活で出る二酸化炭素を減らし、地球温暖化を防ぐ「エコ」がテーマ。新設された小学校1～3年

生が対象の「チャレンジ賞」に選ばれた。

石田さんは外出時に水筒を持ち歩いて水分補給すれば、自動販売機を動かしたり、ペットボトルを製造したりする際に生じる二酸化炭素の量を、1人あたり1日約40%減らせることなどを調べた。家族や担任教師の意見も取り入れ、目を引く色紙やイラストも使いながら、1122週間かけてA3判の新聞にまとめた。

石田さんは「使わなくなった段ボールなどで飛行機やロボット作りもやってみたい」と、エコな工作にも関心を示している。(富岡万葉)

ち着いていた。いい日と悪い日が交互にやってくる、症状は波のごとく。

写真のいくさんはほほえみ、表情はかわらぬ。写真は一つの命の変化を少しずつ、また鋭く映す。

04年7月21日 両足が急に激に細くなってしまった。ほんのちよっとしたミスが大きなことになってしまった。もう少しやさしく介護していれば…。後悔先に立たず。

数日前に骨折し、ベッドに横になっていくさんの写真には、こう書かれていた。

同年9月6日に発作があ

り入院したいくさんは、そのまま意識が回復せず、約1カ月半後、86歳で亡くなった。その日のページには、緑が美しい庭の写真が1枚だけ載っている。

10月26日 目の前で命が抜けていった。急に終わった。8年前、父の臨終の際に母がベッドにひれ伏した姿を思い出す。

亡くなるまでに撮った写真は3600枚以上。撮影を始めてちょうど10年が経った11年9月、山崎さんは写真と日記の整理をブログ上で始めた。母との3年間を改めて見つめ直すきっかけ。入場無料。(清宮悠)

絵手紙の会が熊谷で記念展



熊谷市内の絵手紙愛好家グループ「ANDANT E」の発足10周年を記念した絵手紙展が7日まで、同市仲町の八木橋百貨店8階オープンギャラリーで開催されている。会員10人と講師の新井志津さんによる絵手紙で作ったのがきやカレンダー、扇子など約300点を展示する。

午前10時～午後6時(7日は午後4時まで)。問い合わせは田中さん(090・5513・8998)。

研修施設を飯能に新設

ちふれ化粧品

ちふれ化粧品(本社・川越市)はこのほど、飯能市茜台に「飯能研修センター」を新設し、飯能グラウンドを整備した。両施設は地域住民にも開放される。木造1階建ての研修センターは、同社が飯能新工場建設のために取得した用地内にあり、広さ約540平方メートル。社内研修や会議、クリエイションなどに利用される。人工芝のグラウンドは約8600平方メートルの広さで夜間照明を完備。女子サッカー・などしりーグ「ASエルフエン埼玉」の練習グラウンドや、子どもたちのサッカー教室などに使われる。

DIARY 母と庭の肖像

山崎弘義 (大隅書店 3240円)



「命の二つの有様を定点観測として浮かび上がらせようと思った」。写真家の山崎弘義さんは、撮影の動機についてこう記している。

二つの命―認知症が進んでいく母と、自宅での介護をするようになってから、なぜ

か気になる庭の植物。86歳で亡くなるまでの3年間、ほぼ毎日、母と自宅庭の一隅を撮り続け、枚数は3600枚を超えたという。その中から数日ごとに拾い上げ、写真集にまとめた。公刊にちゅうちょはあったが「現に人と対面し、

悩み、苦しんでいる人へのなにかの生きるヒントとなってくれること」を願った。写真⑤は、撮り始めて6日目。写真⑥は亡くなる3カ月前。抱きかかえようとしたら、それだけで右腕が折れてしまったという。

【視線】

DIARY—母と庭の肖像 [著] 山崎弘義

ツイート

おすすめ 24

2015年04月19日



「またもや家に帰ると言い出して目つきが攻撃的になる……」と、書かれた2002年6月30日の写真



認知症となった母親の晩年の3年余りを綴（つづ）った「日記」である。著者は写真家。左頁（ページ）に日付と出来事を書き、右には2枚の写真を並置する。1枚はその日の母、もう1枚は同じ日に撮った自宅の庭だ（最初と最後に例外がある）。

さまざまな「ずれ」がある。笑みを含んだ表情でこちらを見つめる写真に「またもや家に帰ると言い出して目つきが攻撃的になる。一昨日、俺が怒鳴りつけたことを覚えているのか」という文が添えられている。前頁から10日以上が経っている。この間になにがあったのか（撮影自体はほぼ毎日なされたようだ）。

母は死に行くことが確実な存在。庭にあるのは、冬枯れしていても春になれば再び芽吹くことのある生物だ。並べるのは、結構残酷である。でもそれゆえにこそ、山崎いくという人間の存在の一貫性と表情の豊かさが見えてくる。人間の老いに「枯れる」という言葉はふさわしくないこともわかってくる。

母は毎回、朝に撮影されたという。清らかな光の中、白い背景の前に母を立たせてシャッターを押す瞬間、息子はなにを感じただろう。辛（つら）い一日が再開することへの戸惑い、まだここに生があることへの喜び、疲れがとれないことへの諦念（ていねん）、やるせない愛情……きっと複雑だったはずだ。でも、朝の光はそれらを昇華させ、眼（め）の前にいる人の顔を美しく浮かび上がらせる。

この厳然たる事実は救いだったはず。そしてそれを伝えたいからこそ、母の死から10年以上が経った今、刊行されたのではないだろうか。

◇

大隅書店・3240円

「朝日新聞」2015年4月19日付朝刊 読書面に掲載。評者は、保坂健二郎氏。

7人の卓越した目による選出 写真集&写真展

2015年

ベスト5を選ぶ

今年も全国各地で多数の写真展が開催され、各出版社からは続々と新しい写真集が発刊された。その中から、後世にも残るような名作、傑作は生まれたのだろうか？ 各方面で活躍中の写真の専門家の方々に、今年印象に残った写真集と写真展のベスト5を挙げてもらった。

写真評論家
飯沢耕太郎
が選ぶ
写真集&写真展ベスト5

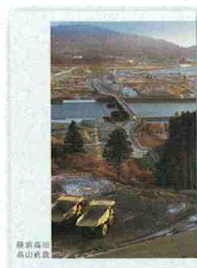


【写真集ベスト5】

- 1 神蔵美子『たまきはる』（リトルモア・3240円税込）※以下すべて税込価格
- 2 山崎弘義『DIARY 母と庭の肖像』（大隈書店・3240円）
- 3 畠山直哉『陸前高田 2011-2014』（河出書房新社・4212円）
- 4 初沢亜利『沖繩のことを教えてください』（赤々舎・4104円）
- 5 猪瀬光『猪瀬光全作品』（月曜社・9720円）

神蔵美子『たまきはる』

Best 1



畠山直哉

『陸前高田 2011-2014』

たまきはる

神さまがいるとしたら、ここ
神蔵美子



山崎弘義『DIARY 母と庭の肖像』

前作『たまもの』（筑摩書房、2002年）でも、神蔵美子の「私写真」の凄みには震撼させられたのだが、それから15年を経て刊行された『たまきはる』では、さらにテキストと写真の密度が増し、読んでいて息苦しくなるほどだ。

山崎弘義『DIARY 母と庭の肖像』は不思議な安らぎに満たされる写真集だ。認知症の母親の肖像と自宅の庭の片隅の光景を、ほぼ毎日撮影し続けているのだが、その微妙な変化の様相に次第に引き込まれ、次第に山崎の眼差しと同化していくように感じる。

2011年の東日本大震災後、大きな被害を受けた故郷の街を撮影し続けている畠山直哉の営みが、写真集としてまとまった。静謐な、だが強靱な骨格を備えた写真群は、震災の記憶を語り継ぐことの重みを伝えてくれる。

初沢亜利の『沖繩のことを教えてください』は、沖繩に対する新たな見方を提示する写真集である。「ノンケのナイチャー」の視点に立ち、軽やかに表層的な事象を撮影しながら、沖繩の現実をいきいきと浮かび上がらせている。

猪瀬光は、30年以上かけて、日本の湿り気のある風土に根ざした作品世界を深化させてきた。「全作品」の集大成は、彼の写真が孤立した営為ではなく、むしろ正統的な「日本写真」の伝統を受け継ぐものであることを教えてくれる。

【写真展ベスト5】

- 1 ヴォルフガング・ティルマンス『Your Body is Yours』／7月25日～9月23日・国立国際美術館
 - 2 「戦争と平和 伝えたかった日本」／7月18日～2016年1月31日・INU PHOTO MUSEUM
 - 3 須田政一「筋膜」[SOLO]／5月1日～31日・Gallery Photo Synthesis・6月27日～7月18日・成山画廊
 - 4 深瀬昌久「救いようのないエイリスト」／5月29日～8月14日・DIESEL ART GALLERY
 - 5 赤鹿麻耶「びよんびよんプロジェクト Vol.1 Did you sleep well?」／9月9日～14日・松の湯画廊
- ヴォルフガング・ティルマンスの国内では11年ぶりになる美術館での大規模な個展は、この写真家の展示・構成能力の高さ、新たな領域を切り開いていく構想力がまったく衰えていないことを見せつけるものとなった。
- 「戦後70年」ということで、戦中・戦後をふりかえる展覧会企画が目についたが、その中でも、小原真史と白山眞理がキュレーションした「戦争と平和」展は、出色の出来映えだった。貴重な資料・写真の展示だけでなく、「報道写真」がその時代にどのような役目を果たしてきたか、その光と影がくっきりと浮かび上がってくる。
- 須田政一のこのところの発表のペースは、やや常軌を逸している。何かに突き動かされるように、新作を次々に出してくるのだが、そのすべてが、背筋が凍りつくような凄みのある傑作なのだ。

写真評論家

上野修

写真集&写真展ベスト5



【写真集ベスト5】(発売順)

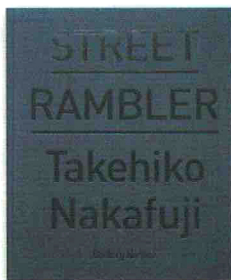
- 中藤毅彦『STREET RAMBLER』(Gallery Niepe: 7,000円)
- 尾形一郎・尾形優『沖繩彫刻都市』(羽鳥書店: 3,672円)
- 本橋成一『炭鉱(ヤマ)』[新版] (海鳥社: 3,450円)
- 柴田敏雄『Concrete Abstraction』(Akio Nagasawa: 1,644円)
- 太田順一『無常の菅原商店街』(フレーシャ・センター: 3,024円)

【写真展ベスト5】(開催順)

- 佐藤信太郎『The spirit of the place』(2014年10月31日~12月15日・キャンギャラリス)



尾形一郎・尾形優
『沖繩彫刻都市』



中藤毅彦
『STREET RAMBLER』



本橋成一
『炭鉱(ヤマ)』[新版]

● 蛭川実花『Self-image』/1月24日~5月10日・原美術館
● 大島洋『幸運の町・三閉伊』/7月1日~14日・銀座コンサロン /『そして三閉伊』/6月30日~7月13日・新宿コンサロン
● 鈴木理策『意識の流れ』/7月18日~9月23日・東京オペラシティ・アートギャラリー
● 坂田栄一郎『STORMY WEATHER』/10月2日~11月15日・AKIO NAGASAWA Gallery

自由に見て、何かを感じてほしい。そのような類の作者のことばに、そこで出会ったのは、なんの兆候だろうか。あまりにも透明なそのことばを前に、このまなざしはこわばり、このからだは途方にくれる。写真集を見るのに、ページを捲る以外の、どんな動きがあるのだろうか。写真展を見るのに、壁に沿って歩く以外の、どんな動きがあるのだろうか。それらの動きに、どんな自由を見出せばいいのか、と問うほど素朴でもないつもりだが、一年の写真集と写真展をふりかえったときに、まず思い浮かんだのが、このことであつた。

理解してしまうことは、踏み越えてはならないことを踏み越えることであり、どこかいけない振る舞いだと感じ



蛭川実花
『Self-image』



佐藤信太郎
『The spirit of the place』

てしまうのは、いかにも古めかしい感覚だと重々承知のうえで、それでもその感覚が拭えないのは、そもそも新しいものにもさほどの憧れもなかったからかもしれない。そんな感覚でなにかを——なにかというよりは写真を——見はじめるには、自由さよりも、展覧会場を歩く、本を捲るといった近代的な儀礼への、僅かな抵抗、躊躇がやはり不可欠だったりもする。

けつして表現されることのない、このような見えない抵抗や躊躇は、どこからやってきて、どこへ消えていくものなのか。展覧会場を出るとき、本を閉じるときに、どこにも必然性がない

- 【写真集ベスト5】
- 1 川口和之『沖繩幻視行』(蒼書舎: 3,780円)
 - 2 『猪瀬光全作品』(月曜社: 9,720円)
 - 3 榎倉康二『予兆』(東京パブリッシングハウス: 1,600円)
 - 4 渡辺兼人『既視の街』(東京総合写真専門学校出版局: 1,800円)
 - 5 山崎弘義『DIARY 母と庭の肖像』(大隅書店: 3,240円)
- 『沖繩幻視行』は、今年第27回「写真の会賞」を受賞した写真家グループ「Photo Street」の同人である川口和之が76年から沖繩に通って撮影したモノクロの写真集。東松照明の「太陽の鉛

写真史家
金子隆一
が選ぶ
写真集&写真展ベスト5

のように、それを問うことにさして意味はないのかもしれない。だが、無根拠や無意味といった、ありふれたことばで、この出来事を呼びたくもないこともたしかである。

さて、いうまでもなく、ここにあげた写真集と写真展は、このような詩的な雑感とはなんの関係もなく、ということば、むしろ詩的な放心において選んだものである。選んだ理由は、(反語ではなく)自由に感じていただければと思う。なお、順番は、発表順で他意はない。

書店員さん
に聞いた

2015年 写真集売り上げランキング BEST 5

【青山ブックセンター六本木店】

東京都港区六本木6丁目1-20
六本木電気ビルディング 1F
03-3479-0479

店長
山崎加奈さん



- 『SAPEURS the Gentlemen of Baongo』
(青幻舎・2,484円)
- 川島小鳥写真集『明星』(ナナロク社・3,240円)
- 濱田英明『ハルとミナ』(リプロアルテ・2,970円)
- 島山直哉『陸前高田 2011-2014』
(河出書房新社・4,212円)
- 上田義彦『A Life with Camera』(羽鳥書店・19,440円)



「今年ダントツで売れたのが、世界一服にお金をかけるエレガントでカッコいいコンゴの男たち＝サプールをとらえた写真集。発売前から話題となった川島小鳥の『明星』、濱田英明『ハルとミナ』など。そのほか島山直哉『陸前高田 2011-2014』や上田義彦『A Life with Camera』もコンスタントに売れています」

筆」とは異なる沖縄への私的なまなざしは、懐かしさを超えて沖縄の原像を現在の沖縄の現実へと焦点を結ばせる。展覧会に合わせて刊行された『猪瀬光全作品』は寡作な写真家の進行形の全体像を示すものであるだけでなく、展示以上に作品世界の濃密な物語を雄弁に語っている。『予兆』は、コンセプトチュアルな現代美術家である榎倉康二の未発表のコンタクトプリントを中心に編まれたもの。物質を触覚的にとらえるまなざしの軌跡は、「写真」の起源を問いかける。『既視の街』は、渡辺兼人の代表作であるが、初版(新潮社)にあった金井美恵子のテキストを外した本書は、純粋な写真力が際立っている

写真展ベスト5

- 1 「浮世絵から写真へ」視覚の文明開化
— 10月10日〜12月6日 江戸東京博物館
- 2 大島洋「幸運の町・三閉伊」／7月1日〜14日・銀座コンサロ／「そして三閉伊」／6月30日〜7月13日 新宿コンサロ
- 3 鈴木理策「意識の流れ」／7月18日〜9月23日・東京オペラシティアートギャラリー
- 4 丹野章「昭和曲馬団」／9月12日〜19日・Zen Foto Gallery
- 5 尾形一郎・尾形優「沖縄モダンズム」／10月3日〜11月7日・タカ・インシキヤラー・フォトグラフィック・フィルム

る。『DAIRY 母と庭の肖像』は、写真とは表現のメディアであることよりも、痛切なコミュニケーションの道具であることを示している。

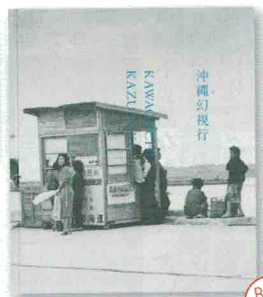
今年も見たい／見るべきと想っていた展覧会を数多く見逃した。ここに取上げたものは決して今年のベストではなく、私が辛うじて見ることができた写真展の中で、心に留まったものである。「浮世絵から写真へ」は、幕末から明治における視覚メディアの変容をテーマにしたもの。学芸員の丹念な調査にもとづく新しい発見があり、近代化してゆく社会の中で写真がどのような浸透していったが興味深々たるものであった。「意識の流れ」は、なによりもオリジナル・プリントの圧倒的な力をうかがわせるもので、展示空間の濃密さが際立っていた。大島洋の二つの展示は、東北・岩手の「三閉伊」に関わる写真家の写真経験の時を隔てた



『猪瀬光全作品』



榎倉康二『予兆』



川口和之『沖縄幻視行』

Best 1



鈴木理策
「意識の流れ」



大島洋「幸運の町・三閉伊」／「そして三閉伊」



「浮世絵から写真へ
— 視覚の文明開化 —」

Best 1

変容が意味深い。「昭和曲馬団」は丹野章が「10人の眼」(1957年)に出品したもので今もそのまなざしの確かさが、尾形夫妻による「沖縄モダンズム」は建築家ならではのユニークなまなざしを感じさせるものであった。

桐谷麗了子

写真集&写真展ベスト5



【写真集ベスト5】（順不同）

● 広田尚敬「鉄道ものがたり」（クレヴィス2 376円）

● 「渡辺 淳の世界—スケッチ・静物・広告・報道—」（JCIIフォトサロン・800円）

● 「『写真』 見えるもの／見えないもの #02」（東京藝術大学、「写真」展実行委員会 2006円）

● 「生誕100年 写真家・濱谷浩」（クレヴィス・2401円）

● 「山口小夜子 未来を着る人」（河出書房新社 2916円）

本誌連載「麗了子がめぐる写真について」の二、三の事柄で、展覧会につ



広田尚敬
「鉄道ものがたり」



「渡辺 淳の世界—スケッチ・静物・広告・報道—」



「生誕100年
写真家・濱谷浩」

【写真展ベスト5】（順不同）

● ジュゼッペ・トルナトーレ&ミンモ・ピンタ

いて綴るようになり、出版物の見方が変わってきた。展覧会を機に出版される作品集は、資料として重要なだけでなく、展覧会と呼応し、思考へと誘い、新たな問いを生み出すことがある。ここでは、そのような本を選んだ。たとえば、広田尚敬の一冊は、長年の試行錯誤の軌跡である展示を、鉄道への圧倒的な肯定で包み込む感動がある。藝大の展覧会は、見る者を突き放すような強度があったが、小冊子は逆に、親密に語りかけてくる。JCIIの図録は、ページ数は少ないが、内容が凝縮され、愛着のわく作りになっている。それが、渡辺淳の世界観にもびつたりと合っていた。濱谷浩の写真集は、展覧会がなせ1960年代までの作品に注目したのか、その意図に、より深い理解が促される。山口小夜子展は、映像上映やインスタレーションなどの多岐にわたる内容。カタログ上の写真で振り返ると、展覧会を写真展として追体験するようだった。

クラー「ニュー・シネマ・パラダイスの原風景」／9月5日〜30日 イタリア文化会館

● 中井精也「la Gare de Paris」／2014年12月5日〜1月8日・エフソニイメーjingタギヤリ・ラ・サート

● 吉野信「ネイチャー・ワールド」／1月5日〜21日・アイデムフォトギャラリー「シリウス」

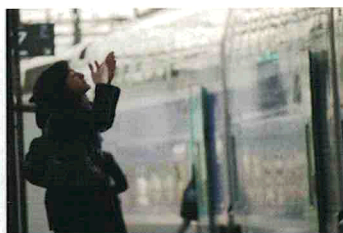
● 岩合光昭「ふるさとこのねこ」／7月25日〜8月31日・渋谷ヒカリエホールB

● 第36回 山岳写真の会「白い峰」写真展「2015年頭展 富士山」／1月5日〜15日 富士山フォトサロンスペース1・2

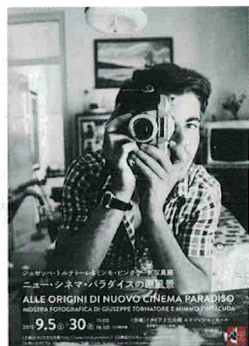
写真展と呼ばれるものは実に幅広い。不思議なもので、書いたものより、言葉にできなかった写真展がずつと心に残っていたりする。ここにあげたのは、そのような展示である。

「ニュー・シネマ・パラダイスの原風景」は、映画監督と、映写技師で写真家という二人が写真で綴るイタリア。生活の一場面がまさに映画のようだ。

中井精也の鉄道写真には、電車が写っていないものさもある。しかし、作品はたしかに鉄道への愛に裏打ちされている。吉野信の展示は、動物と風景を、縦と横のパノラマを組み合わせて構成。自然の魅力を迫力ある空間で表現した。「ふるさとこのねこ」は、猫の家族の物語だ。会場外には、来場者を持ち込んだ猫の写真から、岩合がお気に入りの猫を選んだコーナーがあり、作品のぬくもりが滲み出しているようだった。「2015年頭展 富士山」では、同好の士が、同じ被写体と繰り返し向き合うことの喜びと、奥深さを感じた。



中井精也「la Gare de Paris」



「ニュー・シネマ・パラダイスの原風景」

写真批評・写真史研究
が選ぶ
写真集&写真展ベスト5



【写真集ベスト5】

① 山崎弘義「DIARY 母と庭の肖像」（大隈書店・3240円）

② 皇山直哉「陸前高田 2011—2014」（河出書房新社・4212円）

③ Xu Yong (徐勇)「NEGATIVES」(New Century Press・8700円)

④ 草野庸子「UNTITLED」(自費出版・3000円)

⑤ 榎本祐典「浮遊漂砂」(自費出版・7000円)

2015年 写真集&写真展ベスト5を選ぶ



榎本祐典
『浮遊漂砂』



草野庸子
『UNTITLED』



Xu Yong (徐勇)
『NEGATIVES』

近年、学術上でも芸術表現上でも「写真の物質性」にますます関心が集まっており、写真集の制作にも大きな影響を及ぼしている。とくに紙や布といった材質へのこだわりや製本技法など「手に触れる」部分で様々に趣向を凝らしたものが目立つ。こうしたなかで、書物というメディアに古くから備わる「所作」にも注目したい。①は老いゆく認知症の母と自宅の庭を被写体に、日記や家族アルバムのように「めくる」こ

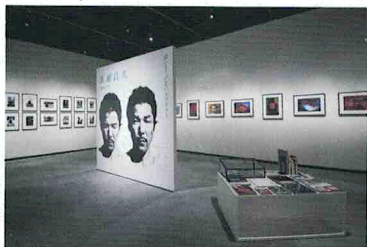
とで月日のどうしようもない経過を讀者に体感させる。②は作者がこれまで主にスライドという移ろい消えゆくメディアで伝えてきた震災以降の「陸前高田」を、今回は印刷物として「綴じて残す」決断をしている。③は1989年の天安門事件の際に撮影したカラーネガをネガのまま印刷、スマホのアプリで反転させるとポジ像として浮かび上がる作りとなっているが、中国における検閲と書物の関係や民主的な道具としてのスマホの未来など、歴史的な想像力を喚起させる。

【写真展ベスト5】

- ①「富士定景—富士山イメージの型」、「戦争と平和—伝えたかった日本」／1月17日〜7月5日／7月18日〜2016年1月31日・INU PHOTO MUSEUM
- ②「エドワード・スライディー」『For Nine Postcards』／10月25日・神奈川県立近代美術館（鎌倉館）
- ③深瀬昌久「救いようのないエゴイスト」／9月26日〜10月14日・DIESEL ART GALLERY
- ④題府基「Still Life」／2014年11月30日〜2015年1月11日・MSAKO & ROSEN
- ⑤谷本恵「Party」／9月18日〜7月5日・100 Photo Gallery

アーカイヴ概念の普及によりあらゆる写真（資料）が収集される昨今だが、それらを死蔵させることなく如何に「再起動」させるかが今後の課題となっている。①は戦後70年の年に日本という国が幕末明治から終戦後まで写真を介して国内外でどのように伝達されてい

© Masahisa Fukase Archives,
photos by Wataru Kitao



深瀬昌久「救いようのないエゴイスト」



Best 1
「富士定景—富士山イメージの型」

ったのかを、豊富な資料のもと丹念に検証している。③は物故作家である深瀬氏の写真をシリーズごとに紹介する展覧会で、まさに再起動と言える。⑤はカメラの再起動という意味で興味深い。中古で購入したカメラで海外の音楽フェスを撮影したところ、日付機能が悪くて過去の時間を刻んだが、かえってフェスの超越性が際立つ効果となっている。再起動という意味で最も可能性を感じたのは②のスライドショーだ。神奈川県立近代美術館の開館・閉館の音楽を作曲した音楽家の故・吉村

弘氏の遺したスライド写真を別の作家が自らの目で編集し上演する。この試みは美術館等の収蔵品に新たな可能性を開かせるきっかけになるのではないだろうか。

鳥原学 が選ぶ 写真集&写真展ベスト5



【写真集ベスト5】（順不同）

- 菱沼勇夫『LET ME OUT』(Zen Foto Gallery・4700円)
- 上平竜矢『星霜連関』(Zen Foto Gallery・4500円)
- 山崎弘義『DIARY 母と庭の肖像』(大隅書店・6040円)
- 『築地』写真（日本写真企画・5400円）
- 岡上淑子『はるかな旅—岡上淑子作品集』(河出書房新社・3000円)

若い写真家の小さな写真集を多数目にする。菱沼勇夫の『LET ME OUT』は性的な衝動を演劇性のうちに昇華させ、多様な象徴性を獲得している。借り物的と思われるものもあるが、貪欲さが遥かに上回っていた。

読後感が充実したのは上平竜矢の『星霜連関』。地霊をもとめて日本各地を旅し、風景の亀裂にその源泉を見出し、下平の身体性の練度の成果だ。続いてベテランの仕事。山崎弘義『DIARY 母と庭の肖像』は3年間の介

書店員さん
に聞いた

2015年 写真集売り上げランキング BEST 5

【ジュンク堂書店 池袋本店】

東京都豊島区 南池袋2-15-5
藤久ビル東六号館
03-5956-6111

芸術書担当
下田裕之さん



- 牧野直樹『しょんぼり顔のモフモフ猫 ふーちゃんやけども。』(左右社・1,620円)
- トマ・ジョリオン『世界の美しい廃墟』(パイインターナショナル・3,240円)
- 渡部雄吉『張り込み日記』(ナナロク社・2,916円)
- 青山裕企『むすめと! ソラリーマン』(KADOKAWA/メディアファクトリー・1,404円)
- 五十嵐健太『フクとマリモ』(角川マガジンス・1,080円)



Best
1

「ツイッターで話題となった、猫のふーちゃんの初写真集はかなりの売れ行きでした。パイインターナショナルの『世界の〜』シリーズ、壁面展示などのフェア展開を行った渡部雄吉『張り込み日記』もよく売れました。幅広い層のお客さんがいらして下さいますが、全体としてかわいくておしゃれな内容の本がよく手に取られています」

【写真展ベスト5】 (順不同)

● 広川泰士写真展「BABEL Ordinary

護生活の記録。母の肖像と庭の一隅の写真とを併置し、死と回帰の様相を対比する。思い浮かんだのが「関係の密室性」という言葉だ。

● 『築地仁 写真』は、縦位置で撮られた都市の断片の集積。より表現のミニマルさが際立つのは「純粹」な写真への探求心が継続してきたからだ。本書を長く待った甲斐があった。

● 『はるかな旅 岡上淑子作品集』はシユルレアリスム写真の評価の見直しを迫る一冊。1950年代の芸術運動との関連も見据えて読まれていくはずだ。

landscapes」/ 2月13日〜3月24日・キャノンギャラリーS

● ヴォルフガング・ティルマンズ『You Body is Yours』/ 7月25日〜9月23日・国立国際美術館

● 「戦争と平和 伝えたかった日本」/ 7月18日〜1月31日・NU PHOTO MUSEUM

● カトウキギ 戸澤勇次『滝』/ 6月15日〜30日・art room 401

● 真月洋子『floating sign』/ 6月4日〜24日・エフソニイミジナギヤラリーエフサイト

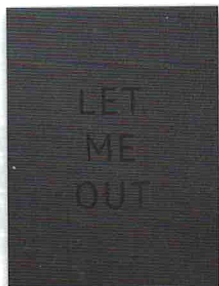
空間に入った瞬間、写真がこちらに飛び込んでくるような体験をしたい。その後でのみ思考や言葉も生まれてくる。広川の「BABEL Ordinary landscapes」がまさにそうで、種々の構造物の建設と崩壊を巨大プリントから、意味を悟る以前に、暴力的なカタルシスが押し



はるかな旅
岡上淑子
『はるかな旅—
岡上淑子作品集』



下平竜矢『星霜連関』



菱沼勇夫
『LET ME OUT』

よせた。

ティルマンズの展示上手はますますだが、さらに自在な域に達していた。個と社会、そして公との関係を硬軟について、語り口の豊かなこと。批評性のなかに、ユーモアがあって飽きさせない。

こうした視覚的な関連性は、資料展示においても必要だと思う。その意味で「戦争と平和 伝えたかった日本」は良き例を示していた。



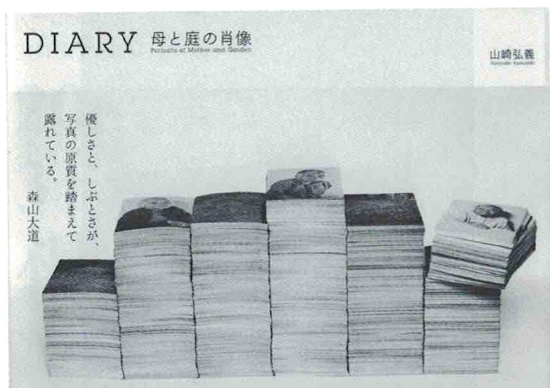
「戦争と平和—伝えたかった日本」



広川泰士写真展
「BABEL Ordinary landscapes」

若い作家たちの、衝動と行為が直結した試みも面白かった。木造アパートの屋上で、生活と制作・発表の場をひとつにしたカトウキギと戸澤勇次。その展示は今を生き延びていることの鮮烈な表れかと思えた。

それと対照的なのが真月洋子の集約的なインスタレーションで、空間にいらるとどこまでも滑り続けるような感覚に陥ったのである。



写真集『DIARY 母と庭の肖像』
(2015年大隅書店、本体3,000円+税)

『DIARY 母と庭の肖像』(大隅書店)を刊行した山崎弘義は1986年に森山大道氏が指導する「フォトセッション'86」に参加後、ストリートスナップで東京の通り過ぎる人々を撮影してきたが、認知症となった母親の介護をきっかけに、その視点が転じて身近な対象へ変化した。撮影から写真集になるまでの経緯について話を伺った。

——刊行するまでの経緯についてお聞かせください。

母が亡くなった2004年10月に撮影が終わり、写真展の準備のためネガとプリントの整理を始めましたが、それだけで2年かかりました。展示の打診をいくつかのギャラリーにしましたが、すべて審査に落ちた中、UP FIELD GALLERY(千代田区三崎町)での個展が2009年8月に実現しました。そのとき見に来てくれた方から写真集にまとめたら、という助言が多くありました。この写真展は母の表情が良いものを50点ほど集めて展示しましたが、写真集にする場合は母・庭・日記の3点のバランスを考えていたのでその方向でまとめました。2013年4月から吉村朗さんの写真集のために大隅直人さんと編集作業をしていたこともあり、大隅書店で発刊しようと思いました。同書店は人文系の書籍を多く出版しており、この写真集に関しては写真専門の出版社ではない方が合っていると思っていました。一般書店に置かれることで、写真に関心のない人の目にも触れる機会があり、様々な意見をもらえたことが良かったです。

——ある意味、普遍的なテーマとも言えます。

母の痕跡、自分の痕跡を残したいということ、そ

認知症の母を 庭と文章を交えて 記録した写真集 『DIARY 母と庭の肖像』を刊行

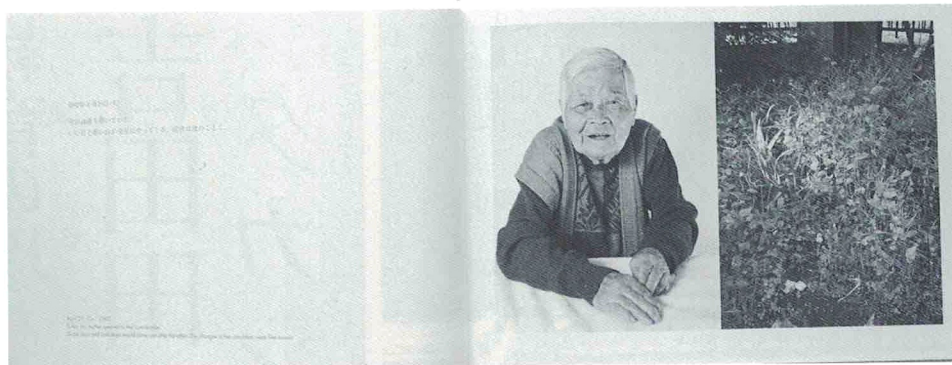


山崎
弘義
YAMAZAKI Hiroyoshi

INTERVIEWS WITH **PEOPLE** in
2015 TOPICS

聞き手・構成

高橋義隆 TAKAHASHI Yoshitaka



2002年4月25日 (木)

れと写真を撮ることによって表現行為になってくるので、追い詰められた生活の中で自分の精神的安定を保つという部分もありました。母と一人息子、被写体と写真家、介護される者と介護する者、その3つの関係性がこの写真集の中で三層に重なり合っているような気がします。

——母親を撮る際に白い背景で撮り、あわせて庭を併置した意図は？

背景が写った写真だと視線が母に向きにくい印象がありました。リチャード・アヴェドンが父親を撮ったシリーズをヒントにして、写真館で撮るポートレートのような感じで積み重ねていったほうが、母の変化も見えてくるのではないかと思います。また家族を題材にした既存の写真集と差別化したい気持ちがあって、母の介護をしていく中で庭の日々の変化に気付くようになりました。庭の植物は時間そのものを象徴していると思います。

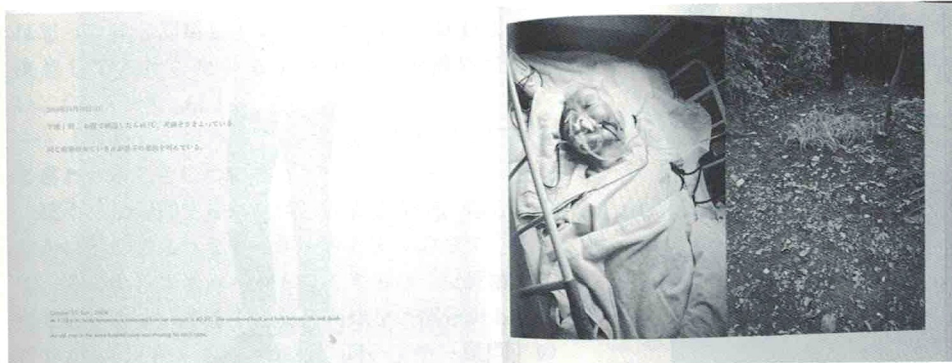
——写真集を刊行したことによって、得たものはあ

りますか？

この写真集の感想として、辛いとか、きついという意見、あるいは息子に在宅で介護されて幸せですねという意見もあり、見る人の置かれた環境によって見え方が大きく違うということを知りました。また母を介護していたことを再度、見つめ直す機会になったと共に撮影した3年2ヵ月が一日一日の積み重ねであったことに改めて気づかされました。

【やまざき ひろよし】

1956年埼玉県生れ、80年慶應義塾大学文学部哲学科卒。同年市役所に入り広報課配属、はじめて一眼レフを手にする。87年東京写真専門学校報道写真科Ⅱ部卒。90年代に東京のストリートスナップを撮影し、個展・雑誌で発表。近年は都市近郊にフィールドを移している。2016年6月『Framework』（工房親）、9月『Outskirts』（コニカミノルタプラザ）にて個展開催予定。現在日本写真芸術専門学校非常勤講師。



2004年10月10日 (日)



『広告写真のモダニズム 写真家・中山岩太と一九三〇年代』松實輝彦(青弓社)

1930年に「アシヤカメラクラブ」を結成し、新興写真から前衛写真をけん引した中山岩太。おもに阪神間の研究者の手によって、以前から芸術的業績について大規模な回顧展や写真集などに纏められてきた。本書はその成果を受け継ぎつつ、別の視点から、その全体像を捉え直そうと試みた。つまり広告写真と営業写真とを軸として、その歩みが詳細に分析されているのだ。中山は、1930年に開催された東京朝日新聞社主催の広告写真懸賞で「福助足袋」が一等に入りその名が広く知られるようになった。著者はこの事績を起点に、黎明期のデザイン界や前衛美術界、そして実業界との関係を通して写真の社会的位相を描き出す。その結果、日本におけるヴィジュアル文化の成立過程（それは戦時体制への同化でもあった）が明らかにされる。本書の登場によって、写真史上の転換期である1930年代の研究が、さらに厚み加えたことは疑いようもない。



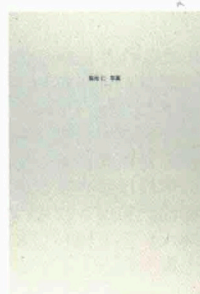
『DIARY—母と庭の肖像—』山崎弘義(大隅書店)

心理状態や社会的状況によって、本書は愛の結晶にも酷薄さの表れにも見えるだろう。著者は老いて認知症を患い衰えてゆく母の肖像を毎朝撮った。結果、カット数は亡くなるまでの3年間で、3600を超えたという。本書の見開きにはその母の姿と、枯れては再生する庭の草木、そして在宅介護に疲れ果てる著者の覚書が並べられている。果ての見えぬ介護の中で、言葉にはときに強い苛立ちが表れる。見るうちに気づいたのは、この3つに、それぞれ違った時間が表現されているということ。それも主観的な時間の感覚である。それを併置することで、著者は介護生活の記憶を配置し直し、新たな意味を引き出そうとしたのではない。とはいえ、そう理解したとしても、本書が誰にとっても救いになるとは言いがたい。ただ、相対化されるものとしての可能性が示されるのみだ。さて本書は介護関係のメディアに取り上げられることが多かった。その事実は書き留めねばならない。



『はるかな旅—岡上淑子作品集』岡上淑子(河出書房新社)

1950年代に斬新なフォトコラージュを発表した作家、岡上淑子の集大成的作品集。簡単に記すと、文化学院科在学中にコラージュの制作をはじめた岡上は、美術評論家の瀧口修造の勧めで卒業後も創作を続けた。作品は写真誌や美術史で発表され、個展も開かれたが、結婚と転居を機に活動が中断。その後、1990年代後半に再評価の機運が高まった。当時、作家が制作に用いたのは『LIFE』や『VOGUE』など、占領軍が持ち込んだアメリカのヴィジュアル誌だった。「黄金の50年代」のファッション写真が、ときに戦争による廃墟を撮影した報道写真に組み合わされている。このような鮮烈なデベイズマンからは、復興期における日本人の精神性が垣間見られるようであり、欧米における再評価もその視点が含まれている。1950年代後半の主観主義写真運動との関連性も含めて、この時期の美術と表現との交わりについても、多くの示唆を受けた一冊だった。



『築地 写真』築地仁(日本写真企画)

単著としては1990年以降の写真集になる。現代建築をそぎ落とすように、すべてクローズアップで、縦位置に切り取られている。この都市と建築という対象は、1980年代からほとんど変化していない。しかし描写はさらに精密になって、湛えるセンチメントは最小に抑えられ、そのため、表現はますます抽象化されている。こうした築地の写真はモダニズムのお手本のようにでいて、じつはそこから一番遠い。画面を構成する力もモノクロの諧調表現も卓越しているが、他者とのコミュニケーションにそれを使うことを拒否している。本書のあとがきにあたる「言葉」では「流通している写真は被写体のイラストレーションだ」と非難する。築地は技術を極め、それをもって写真そのものになろうとする。それが可能かどうかは分からないが、キャリアを通じて常にそこを目指してきたのだ。今なおその不可能性に立ち向かう姿をこうして晒したことに、とりわけ深い感慨を覚えた。



『SUNNY』松井宏樹(PINE TREE BOOKS)

開くたびに好ましく思えた風景写真集。その場の光と色彩、そしてモノのかたちがじつに新鮮に迫ってくる。それらの撮影地がどこかと思えば、すべて日本だった。それも農園や牧場あるいは里山といった、暮らしと近い自然なのである。こうした場所を選び続けてきたというのは、東京農大のオホーツクキャンパスで学んだという経歴と関係があるのかもしれない。ただ情緒だけで写した写真ではなく、具体性を持った観察を含んでいるように思えたからだ。その体験を磨いたのは、写真同人誌『GRAF』などでのインディペンデントな活動だったという。また聞くところによれば、本書の出版を機に著者は独自の写真集レーベルを立ち上げたとのこと。これから本格的な開花期に入る才能なのだろう。写真に限らず、自然をテーマにする優れた表現者は、みな観察によって自然にその精神を浸透させてきた。その系譜に連なる一人になることを願う。

飯沢耕太郎 IIZAWA Kotaro (写真評論家)

- ① ヴォルフガング・ティルマンズ「Your Body is Yours」展(国立国際美術館)
- ② 「戦争と平和—伝えなかった日本」展(IZU PHOTO MUSEUM)
- ③ 「浮世絵から写真へ 視覚の文明開化」展(東京都江戸東京博物館)



「浮世絵から写真へ 視覚の文明開化」

ここ20年間、写真表現の最前線を牽引してきたヴォルフガング・ティルマンズ。その底力をまざまざと示したのが「Your Body is Yours」だった。大小のプリントをまき散らすように貼り巡らす「ティルマンズ展示」の水際立った鮮やかさが健在なだけでなく、映像作品やマルチスライド上映に果敢にチャレンジし、現代社会を新たな視点から捉え直そうとしている。彼に続く写真家がそろそろ出てきてほしいのだが、しばらくはまだ独走が続くのだろうか。

「戦後70年」の記念企画ということだけでなく、日本写真史の再構築という観点からも「戦争と平和—伝えなかった日本」展に注目した。1945年の敗戦を一つの区切りとするのではなく、「報道写真」の展開を通じて、戦前と戦後をひと繋ぎに見ていく視点が形をとってくる。壁全面を覆い尽くす『写真週報』の表紙をはじめ、1,000点以上という出品作品の数が圧巻だった。

やはり日本写真史の再構築という意味で画期的な展覧会だったのが「浮世絵から写真へ 視覚の文明開化」。江戸時代以来の浮世絵（錦絵）と新興の写真という二つの視覚メディアの相互影響関係に着目し、スリリングな絡み合いのプロセスを浮かび上がらせている。特に横山松三郎が考案した「写真油絵」の生々しい迫真性に目を奪われた。

大日方欣一 OBINATA Kin'ichi (写真・映像研究)

- ① 新潟大学地域映像アーカイブ企画、角田勝之助写真展「村の肖像Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」展
(福島県大沼郡金山自然教育村会館)
- ② 山崎弘義写真集『DIARY 母と庭の肖像』(大隅書店)
- ③ 島尾伸三、川島敏生、西原敏弘、瀬野敏ほか「LOST "number" UPDATE」展
(東京・駿河台エスパス・ビブリオ)



角田勝之助写真展「村の肖像Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」

奥会津の山村にある元・小学校の校舎で開催された「村の肖像」展は、同村で1950年代から写真を撮り続けるアマチュア写真家・角田勝之助さんの撮影ネガを調査し、デジタル化をすすめてきた新潟大学人文学部による企画展。人びとが寄り合う折々などに、共同体を構成するメンバーの視点でスナップされた、内側からの村のドキュメントというべきものであり、中身の濃さに圧倒された。ぜひ写真集にしましょうと、この場を借りて云いたい。

山崎弘義さんのこの写真集にも、じわじわと現在形で圧倒され続けている。これこそが写真だ、と思い起こさせてくれる。それ以上、今はまだ何も云えない。

“number”は、1970年代前半に東京造形大学・写真専攻出身の数名で発足した同人誌であり、メンバーがおおよそ40年ぶりで集い、同誌を作っていた当時のネガをたどり直す作業を個々におこなって、新規のプリントにより構成する企画展をおこなった。写真によって自伝をつづるような作業を、複数の主体が相照らし、一堂に会

してくり広げた。こんなこともできるのが、写真なのですね！

ら2億8千万円になつ
と話したという。

務部門はこうした内容
護士を含めてメールで
した。法務担当者は聞
りを踏まえ、「可能な
リスクを排除して進め
よう」としていた。

の後、コンサル契約
五輪のほかに万博やラ
ーなどへの助言を加え
容に変更。契約先が高
理事の会社「コモン
ではなく、深見代表の
ンズ2ということもあ
問題ないと判断したと

て全額を賄賂と認定した。――う。

折々のことば

鷺田 清一

2500

昼を忘れてしまえば、昼に夜が続かなくな
る。

荻野アンナ

「認知症は直前の記憶を好んで蝕む」。
人はその中で「過去と繋（つな）がらないちぐはぐ
な現在」を不安に苛（さい）まれつつ生きるのだと、
自身も長い介護経験のある作家は言う。同
じく母親の介護のさなか、死に向かう母の
表情と庭の草木とを、日々「命の二つの有
様（さま）として撮り続けた写真家・山崎弘義の
写真集『DIARY 母と庭の肖像』に作
家が寄せた文章「静謐（せいひつ）と渾身（こんしん）の間」から。

2022・9・17

「絵」で摘みとる四季の花

Botanical Art ボタニカルアート

植物画

四季の植物が満載のテキスト
をもとに描き方のコツを順序
だてて学べる通信講座。

一流画家の丁寧な添削指導

あなたも
描けます！



名のもと、雰囲気のが
たいこと。それを
に危険かを1世紀前